派生接尾辞 - ish の多義構造（一）※

清　水　啓　子

1．はじめに

言語学研究においては、その研究分野を意味論（語彙）、形態論、統語論に分けて考えるのが一般的でありかつ妥当であると考えられてきた。意味論は各単語の意味構造を分析する。形態論は、ある形態素にどのような要素が接続してどのような意味・機能の変化が生じるか、といった語の内部構造を分析する。そして統語論は、語彙がどのように組み合わされて句や節、文といった構造をつくるのかという規則を述べる。このように言語をモジュラー構造としてとらえ、統語の自立性を認めるような言語観が主流を占めていた従来の言語学では、形態論に関してはそれが文法の一部分として扱われ、語形成はある程度の規則性を持つものとして記述が可能であるためか、意味論的な方向から詳細に分析をすることがあまりなかったように思える。本稿の目的は、あまり注目の向けられていなかった形態論の分野で、認知言語学的視点からどのような寄与ができるか、形態論についても認知言語学的分析が有効であるかどうかを試みることである。(1)

具体的事例として、英語の派生接尾辞 - ish の意味を考察対象とし、それが多義構造をなしていること、またその複数の意味は相互関係をもつネットワーク構造を形成していることを認知言語学の視点から主張する。 - ish は名詞または形容詞に後続し、派生形容詞をつくる拘束形態素であるが、そうした文法範疇の記述だけでなく、派生形容詞 Xish 全体の意味の内部構造を分析することによりさらに興味深い現象がみえてくる。 Xish という派生形容詞が表す意味は、先行する X（名詞、形容詞など）と接尾辞 - ish との間での複雑な相互作用により創り出されるものである。以下では Xish の事例を、 X と - ish との間での意味関係によって分類し、 X（base）と - ish（suffix）の間でどのような意味構築の諸メカニズム／認知プロセスが作用しているのかを詳しく考察する。

2．事例とその分類

派生接尾辞 - ish で終わる形容詞を『CD - ROM ランダムハウス英和辞典』（小学館）で検索し、その結果を語基 X の種類によって以下のように仮に分類した。

Ⅰ．X：名詞
（1）国名：British, Polish, Danish, Spanish, English...
（2）人間の性別、年齢区分：girlish, boyish, babyish, childish, mannish, womanish...
（3）社会的地位、職業：schoolmasterish, monkish, spinsterish, clerkish...
（4）動物：mulish, doggish, sluggish, snailish, owlish, hawkish...
（5）架空の生物：devilish, elfish, impish...
（6）色彩名称：reddish, pinkish, bluish, brownish...
（7）その他の普通名詞：bookish, textbookish, nightmarish, lump-ish, poundnoteish [2]...
（8）人の固有名詞：Micawberish, Queen Annish, Uncle Tomish...
（9）その他の固有名詞：Hollywoodish...
Ⅱ．X：形容詞
（10）形容詞：biggish, youngish, oldish, niceish, poorish, deadish...
Ⅲ．X：数
（11）時刻：fiveish, eightish, noonish...
（12）年齢：fortyish, fiftyish...
Ⅳ．その他
（13）moreish（形容詞比較級+ish）、ticklish, peckish（動詞+ish）

3．意味構築のプロセス

前節にあげた事例の意味の多様性からわかるように、派生の結果できる形容詞 Xish 全体の意味にたいして接尾辞 - ish がどのような意味貢献をしているのかは一義的には決定できない。本節では、意味構築パターンの違いと、それぞれのパターンにおける具体的事例の多さ、つまり生産性（意味構築パターンがスキーマ化している度合い）などから、表1のような - ish の多義性のネットワーク構造を想定し、各事例について詳述する。表は、上部ほど意味派生パターンが規則的で慣習化しており（conventionalized/more

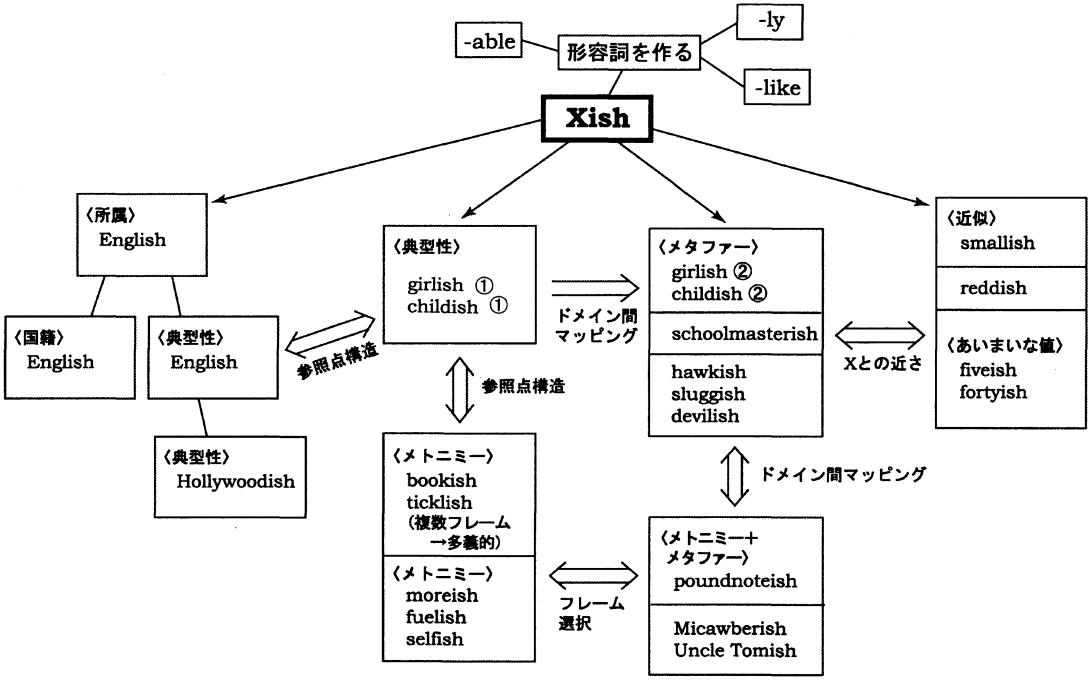


表１．派生接尾辞 –ish のネットワーク構造

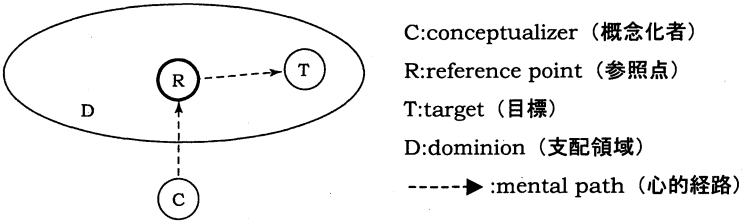
predictable）であり、下部にいくほど個別的（idiosyncratic/less predictable）になるように配置してある。以下、中心的なものから順に、その意味構築パターンと関与する認知プロセスを述べてゆくが、その前に、まず拠って立つ認知言語学的枠組みである、参照点構造（reference-point constructions: Langacker 1993）を概説する。

3．1　参照点構造（reference-point construction）

ある目標のものを指示するために、他の別のものを経由して説明することがよくある。例えば、「大学の向かい側の病院」というのはある特定の病院を指すために「大学」をその基準点／参照点に利用している。Langacker（1993）はこうした参照点によって目標のものに心的接触をする認知プロセスを参照点能力（reference-point ability）とよび、人間の基本的認知能力とみなしている。そしてこの参照点構造が関与する概念アーキタイプ（conceptual archetypes）として、(14) の例のような所有関係、親族関係、身体の部分全体の関係などをあげている。

(14) the boy's watch, the girl's uncle, the dog's tail, the cat's fleas, Lincoln's assassination　　(Langacker 1993:8)

参照点構造は、以下の図1のように表される。



〈図1〉(Langacker 1993: 6)

たとえば、John's watch という目標に心的接触（mental contact）をするために、概念化者はまず参照点である John（R）に注意を向け、その参照点によって想起される目標の集合からなる支配領域（D）の中から（watch という単語によって）その支配領域の中の watch（T）という目標

にたどり着く。図1に表されているように、概念化者はまず（R）に心的接触をし、そこを基準にして（T）に向かうというような心的経路をたどるのである。

3．2 典型性の-ish

このグループに入る用例は以下のようなものである。

(15) a. Mary is so *girlish*.
b. Her way of speaking is *girlish*.
c. Liz had felt herself to be close to Naomi, as she nursed Naomi's children, slept with Naomi's husband, took tea or sherry with Naomi's parents, helped to form the *childish* letters which her stepchildren wrote to Naomi's parents thanking them for presents, for outings. (BNC)
d. He did look *mannish*./ I hate bullying *mannish* men. (BNC)

この-ishは、Xishという派生形容詞の語基のXというカテゴリーにおいてその典型的な成員が持つであろうような属性を有する、つまり、何らかの点でプロトタイプ的成員とみなせる要素を持つことを意味する。また、P is Xish. という表現において、PはXカテゴリーに含まれる（ex: Mary is so girlish.）。PがXカテゴリーに含まれない要素の場合は、後で述べる、メタファー的なXishである（ex: Pete is girlish.）。

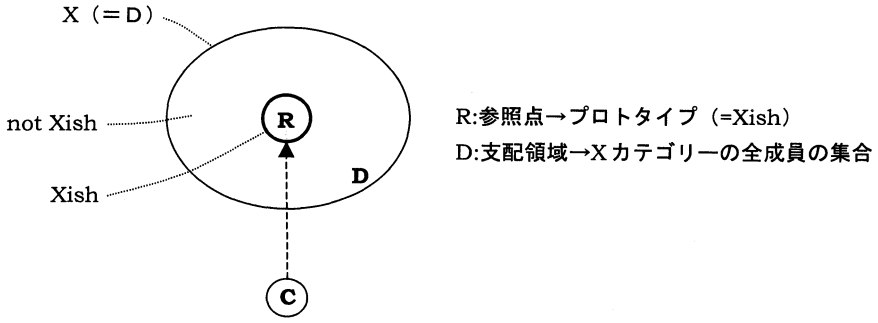
プロトタイプ特性と参照点構造は密接にむすびつく。Ungerer and Schmid (1996:39) は、"...one is justified in defining the prototype as a mental representation, as some sort of cognitive reference point."（下線は筆者による）と述べており、カテゴリーの中心的プロトタイプが参照点に相当する役割を果たすといっている。また、Lakoff (1987: 79) も同様に、"A major source of such [prototype] effects is metonymy — a situation in which some subcategory or member or submodel is used to comprehend the category as a whole... these are cases where a part (a subcategory or member or submodel) stands for the whole category..." と述べ、あるカテゴリー名によって聞き手がまずデフォルト的に想起するのはそのカテゴリーのプロトタイプであり、周辺的成員ではないことを指摘している。杉本（1998）もメトニミー・モデルとしてLakoff

と同様の指摘をしている。たとえば、

(16) a. Normal: She is a mother, but she isn't a housewife.
　　b. Strange: She is a mother, but she's a housewife.
(Lakoff 1987:81)

(16) aの例文で、接続詞butが自然なのは、先行節中のa motherが母親カテゴリーのプロトタイプ（この場合は「母親は一般に専業主婦である」というステレオタイプ）を喚起させ、後続節の内容（she isn't a housewife）と矛盾するからである。

さて、先に図1で示したLangackerの参照点構造は時間軸を前提にした認知プロセスを説明したものであり、静的なカテゴリー構造を説明するものではなかった、という問題をここで解決しなければ、参照点構造とプロトタイプカテゴリーを理論的に結びつけることはできない。そのために、この時点で、カテゴリー構造を「容器のイメージスキーマ（container image schema)」で表すことにし、この容器のイメージスキーマを先の参照点構造と重ねあわせて考えることを提案する。(3) 図1の参照点構造は、以下のカテゴリー構造の図2と対応することになる。この場合のカテゴリー構造は、すべてのメンバーがカテゴリーへ平等に帰属している、内部構造が均一な古典的カテゴリーではなく、中心的プロトタイプ成員から周辺的にいくにしたがい非プロトタイプ的な成員になるというようなプロトタイプカテゴリー構造をなすものである。



〈図2〉カテゴリー構造と参照点構造の対応

図2において、Xish は X カテゴリー全体（D）の中でまず参照される、つまりまず最初に心的接触をもつ（＝デフォルト値として解釈される）プロトタイプ（R）に属することを意味する。(15) a の Mary is so girlish.の場合、上の図2の（D）が girl カテゴリー全体で、girlish は、Mary がその中心のプロトタイプ的成員であること、典型的 girl が持つような何らかの属性を持つことを意味する。ただし、共起する要素や文脈情報、言語外情報によって、どのような側面でプロトタイプ的なのかがさらに精密化されることもありえる。たとえば、(15) b の Her way of speaking is girlish. では、服装やあるき方ではなく、その話し方が女の子に典型的なものであると言っているのである。一言に girlish といっても、いろいろな girlish の側面があり、共起要素などから girlish のサブフレームが明示的に特定されることもある(ex: girlish hairstyle, girlish games, girlish affection)。このパターンの -ish が選び出す X の典型的属性とは、実際に X カテゴリーのメンバーの多くが持っている属性というよりもむしろ、Lakoff 流の理想認知モデル（ICM）が持つ、あるいは社会的に広く定着したステレオタイプ特性とみなされているような属性の場合が多いように感じられる(ex: spinsterish, schoolmasterish, womanish)。

3．3　フレームに基づいた拡張による、メトニミー的な -ish

この節では、X に関する特殊なフレームにもとづいた Xish の意味構築のパターンについて考察する。

3．3．1　複数のフレームからのメトニミー的拡張（多義的な Xish）

(17) a. There was something *bookish*$_1$ and appealing about the old lady... (BNC)
　　b. It is just *bookish*$_2$ way of thinking.

(17) a、b の両例とも、参照点構造にもとづいた意味派生といえる。book というカテゴリー名が参照点として作用し、そこからあるサブフレームを喚起させ、そのフレーム内で生じるある属性をプロファイルしているのが bookish という形容詞である。しかしこの場合、book に関する百科事典的知識からは多様なサブフレームにアクセス可能であり、その様々なサブフレームから、ひとつだけでなく複数のフレームが選ばれて、それぞれ異なったメトニミー的拡張が起きているので、結果として（17）のように

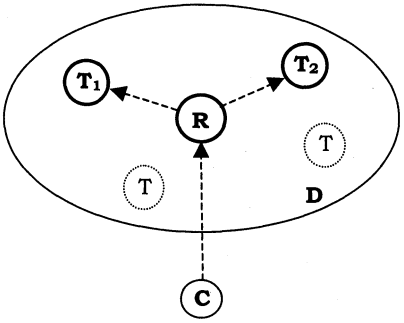
bookish は多義になる。a（$bookish_1$）は「本好きな・本ばかり読んでいる」という意味であり、b（$bookish_2$）は「理論上の話で，実践的ではない」という意味である。

同様に（18）の ticklish も多義的である。

（18）a. If you're *ticklish* on the feet…（BNC）（ticklish：くすぐったい）

b. Privacy is a *ticklish* business where close neighbours are concerned.（BNC）（ticklish：慎重を要する、扱いのむずかしい）

こうした意味派生パターンは、以下の図3のような参照点構造によって説明が可能である（ここでは容器のイメージスキーマを重ねる必要はない）。まずX（book）という言語情報によって参照点（book）にアクセスしたのち、そのXの支配領域（D）をXに関する百科事典的知識の集合と考えると、その（D）のなかから、複数の目標（T）（たとえば本を沢山読む読書好きの人間（T_1）だとか、本に書いてある内容は理論寄りで実践的ではない（T_2）など）にアクセスすることが可能である。支配領域（D）に存在するいくつのどのようなサブフレームと bookish という表現が結びつくかは、慣習的に定着している。



R:参照点＝book
D:支配領域＝bookに関する百科事典的知識体系、サブフレームの集合体（可能なTの集合）
T_1:$bookish_1$
T_2:$bookish_2$

〈図3〉 bookish の意味構築

3．3．2　特定のフレーム選択により、一義的に慣習化しているメトニミー的拡張

前節の例とは異なり、ある特定のサブフレームがひとつだけ選択されて、語基 X に対してかなり詳細な精密化が加えられたメトニミー拡張により意味が創られている Xish がいくつかある。以下がその例である。

(19) Thai food's very *moreish*, isn't it?
(20) You were *selfish* to eat it all yourself.

moreish や selfish の場合、X（more, self）の意味はかなり漠然としていて、想起されるフレームが非常に多様であるはずなのだが、Xish の意味としてある一定の意味が固定し慣習化している。たとえば、moreish の場合、「いつも他人より物を沢山欲しがる欲張りな人物」という意味には拡張していなくて、「（食べ物について）食べ始めたらどんどんもっと食べたくなるほどおいしい」という意味が固定している。selfish に関しても、「個性がある」というような肯定的な意味にはならず、「自己中心的」という否定的な意味がはりついている。

これらの -ish の意味構築パターンは、3．2節でのべた典型性を表す -ish に比べて、より個別的で特殊であり、意味派生のパターンが抽象化／スキーマ化しにくい（=idiosyncratic）事例であるといえる。2節の表1（p.27）において、これらの事例が下方に位置付けられているのは、このように形式（語基＋ish）から意味が予測できない、つまり規則（rule）によってトップダウン的に意味が構成されているのではなく、語彙的性質が強い事例（lexical）であることを反映している。

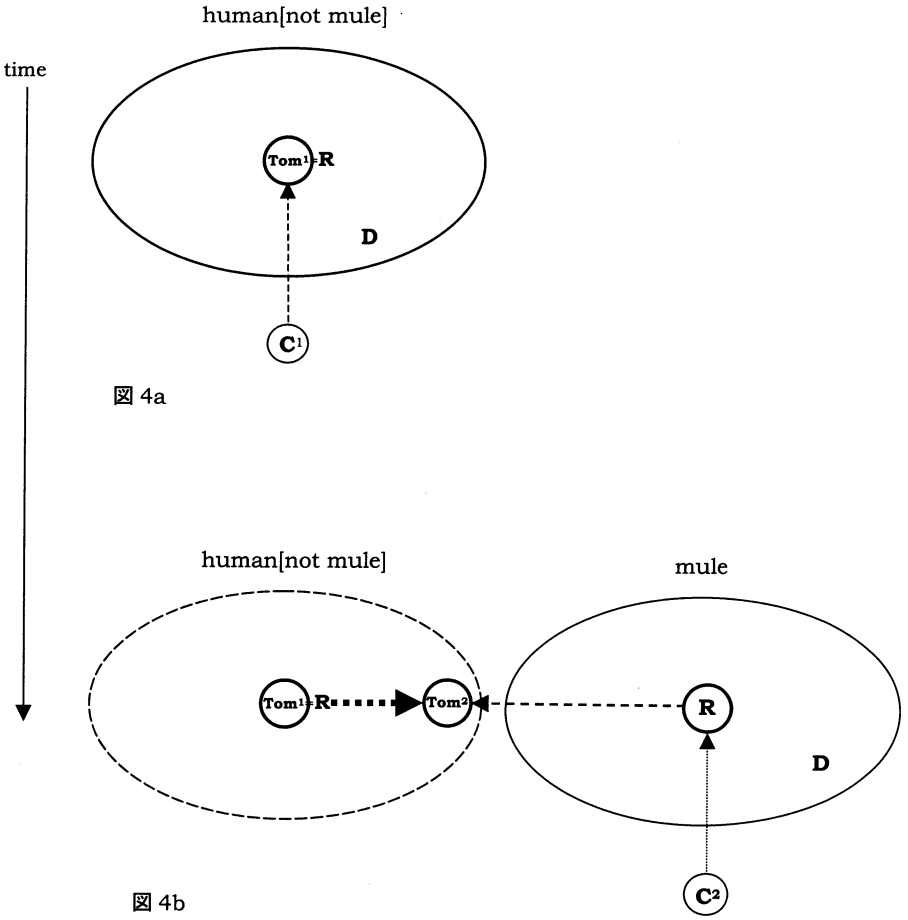
3．4　メタファー的な -ish

ここにあてはまるのは、以下のような -ish の例である。

(21) a. John is *girlish*.
b. It is *childish* of you to cry like that.
c. George could sometimes be almost *mulish*! (BNC)
d. The Gulf war showed the *devilish* destructiveness of modern conventional weapons.

ここでの Xish の用法は [Y is Xish] という形式で代表させることができる。X カテゴリーに属さない Y にたいして、X カテゴリーの典型的メンバーが持つ何らかの属性があることを述べるものであり、X カテゴリーの属性を [not X] である Y の叙述に使用しているので、メタファー的な意味の派生であるといえる。この場合の Xish が意味する X カテゴリーの典型的な属性とは、同レベルにおいて他のカテゴリーと比較した時に、X カテゴリーに特徴的とされるような属性であり、社会的、文化的に習慣化されていて、ステレオタイプと結びついている場合が多い。Lakoff (1987: 79) はステレオタイプもプロトタイプ効果の一種と見なし、プロトタイプ効果を一種のメトニミー（カテゴリー全体とその中心的サブカテゴリーの関係）とみなしている。すると、この Xish の意味構築パターンも、3．2の典型性を表す Xish の説明にもちいた参照点構造の図2（p.30）によって同様に説明できそうにみえてしまう。しかし、図2はカテゴリー構造もかさなっているので、そのカテゴリーには [not X]である Y を含ませることはできない。ここでは、以下の図4のような、X カテゴリーの参照点を基準にしたメタファー的な Xish の認知構造を考えてみたい。

まず、具体的な事例として "Tom is mulish." という発話を考えてみる。はじめの "Tom is..." という段階では、Tom が人間カテゴリーに属するという前提から、とりあえず Tom は人間カテゴリーの典型的なメンバーであると、デフォルト値的に解釈しておく。このプロセスが図4aである。この時点での概念化者を（C^1）とし、この時点での Tom についての位置づけを（Tom^1）としておく。次に図4bのように、"...is mulish." の部分で、この時点での概念化者（C^2）は mule カテゴリーを想起し、その典型（R＝参照点）に心的接触をする。そして次に、この参照点は、前時点での Tom^1とリンクされなければならない。しかし前時点で、Tom^1は human カテゴリーの典型として位置づけられており、mule を参照点とする支配領域（D）の中には存在しない。ここで、mule の参照点（R）は、ある種の牽引力をもって、human カテゴリーの中心に位置する Tom^1を、mule カテゴリーの周辺に（内部までは持ち込めないが）ひきつけ、Tom^2という mule カテゴリーにより近い位置に再配置する（図4bの太い点線矢印)。つまりここで、カテゴリーを容器のイメージスキーマのような心理空間と考えると[4]、Xish という表現は、[not X] カテゴリーの成員を [X] カテゴリーの周辺に近づけるという機能を持つのである。そして、参照点 X はこうした引きつける力の根源（source）の役割を果たす。[5]



〈図 4〉 mulish の意味構築

ここで注目すべきは、メタファー的に意味を形成する Xish のうちには、同じ X（語基）を持っていても、3．2 節で述べた典型性をあらわす Xish の用法も持つ、多義的な事例があるということである。以下に例をあげる。

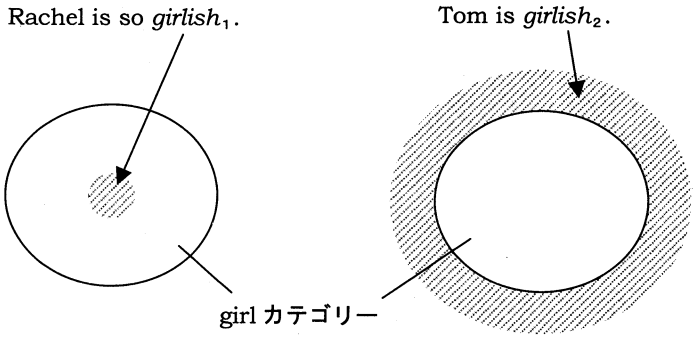
(22) a. Rachel is so girlsih.
　　 b. Tom is girlish.

(23) a. Posi has the most *womanish* ability to choose the worst moments to disrupt a man's thoughts -- usually with something trivial. (BNC)
b. Burden thought him a weak *womanish* fool, despising his red eyes and the muscle that twitched in his cheek. (BNC)

(24) a. He did look *mannish*. (BNC)
b. Her gruff *mannish* exterior hid a sensitive and complex nature. (BNC)

(22)〜(24) の例で、a は典型性をあらわす -ish であり、b はメタファー的な -ish である。

典型性の -ish とメタファーの -ish をイメージスキーマとして図示すると以下のようになるであろう。ここでは容器のイメージスキーマがプロトタイプカテゴリー構造と重ねられているので、中心ほど典型的であり (girlish$_1$)、カテゴリー境界の外側の周辺に位置する要素は、カテゴリーの成員ではないがそのカテゴリーのものと何らかの類似性をもつことを含意している (girlish$_2$)。



〈図5〉典型性の -ish とメタファーの -ish

典型的属性、つまりメタファーを成立させる類似性とは、ただ1つの属性ではなく、複数の類似性がありうる。どのような点で girl カテゴリーに類似するかは、その話し方であったり、身振りであったり、服装であったりと

様々な可能性がある。以下の例を参照されたい。

(25) a. girlish dress, girlish dreams, girlish smiles, girlish figure, girlish maddness, a girlish infatuation, girlish eyes... (BNC)

(25) の例から、girlish という単語だけでは girl のどのような領域の属性にもとづくメタファーマッピングなのかは特定されておらず、その点において vague（不明確）あるいは underspecified（不特定）といえる。

メタファー的に意味が創られる -ish の場合、異種のカテゴリーを交叉するような用法である点から「メタファー的」と呼べるだけでなく、類似点の明示・非明示と言う点でも、直喩表現よりメタファー表現に近い。たとえば、

(26) a. Tom is as stubborn as a mule.
b. Tom is mulish. (stubborn/hardworking)
c. Tom is a mule. (stubborn/hardworking)

(26) a においては mule と人間の Tom との類似点 (stubborn) が明示されているが、(26) b ではそれが言語的に明示されていないので、意味が不透明である。stubborn という解釈の方がより慣習化しているが、hardworking という解釈も文脈によっては可能である。この点で (26) b は (26) c（まさしくメタファー表現）に近い。

3．5　典型性の -ish とメタファー的な -ish の関連性

図 5（p.36）にしめした、典型性の -ish とメタファーの -ish はまったく無関係ではなく、この 2 つの意味派生パターンは密接に関連している。異種カテゴリー間でマッピングするメタファープロセスにおいて、二つの異なるカテゴリーを結びつけるのは何らかの類似性である。この類似性とはまさに、X カテゴリーの典型が持つ属性である。このことから、X カテゴリーから [not X] カテゴリーへのメタファー関係を概念化する前提として、X カテゴリーの典型例あるいは典型的属性を抽出するというメトニミープロセスが存在しなければならない、といえる。メタファーとメトニミーは無関係の異なる比喩現象ではない。

この 2 つの -ish（典型性とメタファー）を包括するような上位の抽象ス

キーマ（overarching schema）を想定することが可能であるが、-ish の複数の意味派生パターンがそれぞれどのように連関し、通時的に拡張・発展してきたかについては、次稿にゆずる。

3．6　メトニミー（サブフレーム選択）＋メタファーによる -ish

poundnoteish という語は『ランダムハウス英和辞典』で見出しとして掲載されており，*Oxford English Dictionary*（第2版 CD-ROM 版）の poundnote の見出しの下に項目として載っているが、British National Corpus では実例がない。OED の記載によると、その意味は affected, pompous といったものになるらしい。実例が見つからなかったので、この語彙に関してあまり多くは述べられないが、一体 poundnote の意味からどのような属性を類似項として抽出すれば、このようなメタファー的な poundnoteish の意味になるのかは、girlish や sluggish ほど明瞭ではない。言い換えれば、この語基（poundnote）から典型的特徴を特定するのは難しく、もっと発展させた情報内容の豊かなフレームをまず想定（選択）することが、この場合のメタファー的意味を創り出す前提として必要である。

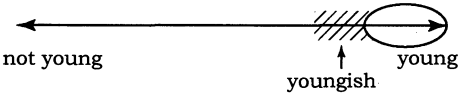
しかし、語基 X の典型的特徴が見えやすいか見えにくいか、慣習化しているかしていないかというのは程度問題であり、その点では3．4節で述べた、単純なメタファー的 -ish の場合と明確な区別はできないともいえる。

(27) Mr Rowland is a man in the mould of Vice-President Dan Quayle: young, handsome and *hawkish*. (BNC)

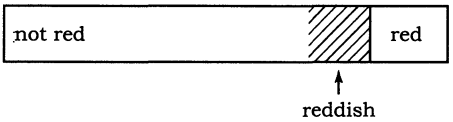
(27) の hawkish にしても「政治的に好戦的な」というメタファー的な意味が定着してはいるが、この場合にも hawk のどういう特徴の抽出なのかという点で、ある特定のサブフレームを選択しているわけで、メトニミープロセスが関与しているのである。ある人物の固有名詞から派生している、Micawberish や Uncle Tomish の場合も同様であろう。それぞれの人物のある特徴が特に際立って目立つがゆえに自然に典型特徴として認められてしまうので、サブフレームを「選択」しているという印象が言語使用者にはすでにないかもしれない。しかし、前節でも述べたように、典型的属性（あるいはステレオタイプ属性）へのアクセスというメトニミープロセスのまったく関与しないメタファーは存在しない、といえる。

3．7　近似（値）を表す -ish

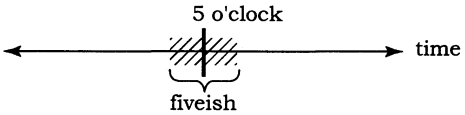
近似（値）を表す -ish は、形容詞につくもの、色彩名称につくもの、数値につくものに大別できる。以下、この順に考察する。図6～8が、それぞれに対応すると仮定するイメージスキーマ構造である。



〈図6〉形容詞



〈図7〉色彩名称



〈図8〉数値(時刻)

3．7．1　形容詞＋ ish

形容詞＋ ish は、図6のように形容詞 X のカテゴリーには厳密には属さないが、[not X]⟷[X] のスケール上かなり [X] に接近していることを表す。段階的形容詞だけでなく、非段階的形容詞にも付く (ex: dead-ish)。形容詞語基に接続して形容詞をつくるので、派生 (derivational) 接尾辞という名称は厳密にはあてはまらない。

(28) He was a very kind, *youngish*, amiable scholar of great distinction ... (BNC)

3．7．2　色彩名称+ish

色彩名称+ish は、図7のように、色彩 X にカテゴリー化できる色ではないが、色彩が段階的に変化しているような心理的空間において、X に隣接する位置にあるような色であることを表す。

(29) A pale *reddish* glow lit the sky.

3．7．3　数値＋ ish

数＋ ish は、図8のように、年齢や時刻の数値を明確に言うのではなく、その前後を含んだおおよその値を示す。かなりくだけた口語表現において使われる。

(30) a. He looks fortyish. (年齢) (10〜90まで言えるが、15や100は言わない)
　　b. Would three-ish suit you? (時刻) (時刻により許容度が異なる。?oneish, ?twoish)

形容詞、色彩名称、数値に接続する -ish に関して共通しているのは、1つの次元を持つスケールが基盤にあって、そのスケール上の X に隣接する値／程度を指示するのが Xish である、ということである。前述の典型性の -ish やメタファーの -ish で基盤になっていたのはプロトタイプカテゴリー構造や容器のイメージスキーマであったが、ここではスケールのイメージスキーマが重要な役割をはたしている。容器のイメージスキーマとスケールのイメージスキーマとの関連性については、次稿において、-ish の多義構造の通時的発展の観点から考察する。

形容詞や色彩名称からなる Xish は X カテゴリーを含まず、それに近いことを表し、数値からなる Xish の場合には X を含んだその前後の幅 (fiveish: 5時前後) を指すという違いがある。こうした差異が生じるのは、前者においては、たとえば young のカテゴリーに含まれるのであれば He is young. と言えば済むし、色彩 red のカテゴリーに申し分なく当てはまるのであれば It is red. と言えばよい、という blocking が作用しており、後者の数値につく場合は語用論的な要因、つまり「5時ごろ」という表現の必要性はあるが、「5時ちょうどは除いた、その前後の時間帯」を言わなければならない奇妙な状況というのはあまりないためであろう。

3．8　国名、地域名＋ ish [6]

国名や地域名に -ish がついた場合、最も多い事例は国籍を表す用法であるが、実際には、「所属 (製作地、発祥地など)」「国籍 (出身)」「典型的特徴」の3つの意味に下位分類することができる。

(31) a. *English* ships, *English* films, *English* newspapers
b. She is *English*.
c. Cricket is the most *English* game.
d. 'We must do something about this exhibition,' Jay said, with the very *English* concentration of one commenting on the vagaries of the weather. (BNC)
e. Once, she had thought of herself as so *English* that however happy she was abroad and even if married to an Italian she would always one day gravitate home. (BNC)

(31) a はすべてイギリスで／イギリス人によって作られたり、英語で書かれていたりする物であり、その製造場所、製作地にもとづいた所属を指示している。b は物ではなく、人間についての English であり、国籍を表す。国籍というのは、大雑把にいえばある人間がどの国で生まれたか、という問題であるので、当然 a の「所属」の下位カテゴリーとみなすことができよう。a, b の English はともに、二項対立的な、境界が明確な古典的カテゴリーである。ある人間の英国国籍が他の人間の英国国籍より、「国籍を持つ度合い」がより高いというようなカテゴリー内の段階性はない。これは、国籍という概念自体が、[X] or [not X] の二価値のどちらかに決定できるように人為的に定められた社会制度の概念であるからである。

一方、(31) c, d, e はそれぞれ most, very, so などの程度を表す副詞で修飾されていることから明らかなように、段階性のあるプロトタイプカテゴリーを構成する。c (the most English game)、d (very English concentration) はどちらも、何か（この場合は game と concentration）があるイギリス的典型性を持つことを表している。e (He is so English.) はある人物について、典型的な（ステレオタイプ的な）イギリス人らしさの度合いが高いことを意味しているので、この場合の English も帰属度に段階性のあるプロトタイプカテゴリーを構成する。

こうした Xish は、表 1（p.27）の左部分のような階層構造を成すと仮定できる。前述した girlish において、girl カテゴリーから girl らしさという典型性を抽出するというメトニミープロセスが存在したのだが、ここでの「所属」や「国籍」から「典型性」への拡張関係においても、同様のメトニミープロセスが関与していることに注目されたい。以下 (32) に示したように、girl が二項対立的カテゴリーであるのに対し、girlish は段階性の

あるプロトタイプカテゴリーに変化するという現象が、「所属・国籍」の English が二項対立的カテゴリーであるのに、「典型性」の English がプロトタイプカテゴリーを成すという関係にも並行して観察される。表1で、girlish などの〈典型性の ish〉のボックスと English の〈典型性の ish〉のボックスが参照点構造という認知プロセス（⇔）において関係づけられているのは，意味派生における概念構築にこうした共通点が存在することを反映させたかったためである。

(32) a. She is a *girl/English*. (→ discrete category)
　　↓プロトタイプ特性の抽出（＝メトニミー）
　　b. She is so *girlish/English*. (→ fuzzy or prototype category)

注：

※　本稿は「日本言語学会　第122回大会」（2001年6月24日、一橋大学）において発表した内容に加筆・修正をしたものの一部である。

（1）認知言語学の多くのアプローチでは、語彙・形態・文法の区別を認めず、このような語彙レベル・句レベル・文レベルのどの単位も、人間の認知プロセスを反映した意味に動機付けを持つものであり、この3レベルは言語体系の中で連続体をなす、と考える（Langacker 2000, Goldberg 1998, 山梨2000など）。

（2）poundnoteish は『CD-ROM ランダムハウス英和辞典』および *Oxford English Dictionary*, 2nd ed.（CD-Rom）に掲載されているが、British National Corpus では実例がみつからなかった。ニュージーランド国籍の英語母語話者数名に尋ねても聞いたことがない、という解答を得た。

（3）容器のイメージスキーマがカテゴリー構造や集合の心的イメージに対応するという指摘については、Johnson（1987）を参照。

（4）この心理空間（mental space）は、Fauconnier の提唱するメンタルスペースとは異なる（Johnson 1987: 25を参照）

（5）ここで根源（source）という用語をつかうのは、Lakoff 流のメタファー理論における source domain との関連性を示唆するためである。

（6）この -ish に関する意味構造は、他の異形態（Japanese, American など）にもあてはまる。

参考文献：

Goldberg, Adele E. 1998. "Patterns of experience in patterns of language". In Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language*. pp. 203-219.

Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind: the Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago, The University of Chicago Press.

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago, The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-point constructions". *Cognitive Linguistics*. 4-1. pp.1-38.

Langacker, Ronald W. 2000. "A Dynamic usage-based model". In Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based Models of Language*. pp.1-63.

Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization*. Oxford, Clarendon Press.

Ungerer, Friedrich and Hans-Jörg Schmid. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London, Longman.

杉本孝司　1998『意味論 2 －認知意味論―』くろしお出版

山梨正明　2001『認知意味論原理』くろしお出版

辞書類：

British National Corpus.　（本文中では BNC と略）

Oxford English Dictionary, 2nd ed. CD-ROM. Version 2.0. Oxford University Press. 1999.

『CD-ROM 版ランダムハウス英和辞典』小学館　1998.

『プログレッシブ英語逆引き辞典』小学館　1999.